

チュートリアル・セミナー概要

一般社団法人日本発達心理学会第26回大会

2015年3月20日（金）～22日（日）

於 東京大学本郷キャンパス

（以下、順不同）

◆ 峯松信明 先生（東京大学）

「音響音声学入門～音声を物理的に眺めて気付く言語発達の不思議～」

◆ 矢藤優子 先生（立命館大学）

「描線情報解析ソフトを用いた描画発達検査の分析」

◆ 高橋雄介 先生（京都大学）

「発達のアウトカムに関する縦断研究」

◆ 星野崇宏 先生（東京大学）

「準実験デザインと因果効果推定：無作為化実験ができない場合のデザインと解析法」

◆ 岡田謙介 先生（専修大学）

「心理学における効果量をめぐる最近の動向」

◆ 麻生武 先生（奈良女子大学）

「フィールドにおける観察という方法：私は必ず現場に戻って来る」

◆ 矢守克也 先生（京都大学）

「アクション・リサーチの方法」

◆ 抱井尚子・末田清子 先生（青山学院大学）・沖潮満里子先生（湘北短期大学）

「構成主義的なグラウンデッド・セオリーの方法」

◆ 安田裕子 先生（立命館大学）

「複線径路・等至性アプローチ（TEA）—過程と発生をとらえる」

峯松信明 先生（東京大学）

「音響音声学入門～音声を物理的に眺めて気付く言語発達の不思議～」

本セミナーでは、音声波形をあまり眺めたことがない方々を対象として、1)音声の物理現象の基礎を理解して戴き、2)音声を物理的に眺めることで気付かされる、言語発達の不思議について触れます。音声には誰が、何を、どのように喋ったのか、など様々な情報が含まれています。しかし音声は物理的には、空気粒子の振動パターン（波形データ）でしかありません。この波形データのどこに、このような豊かな情報が隠れているのでしょうか？前半では、音声波形や音声スペクトルをどのように眺めるべきなのか？そもそもスペクトルとは何なのか、などについて分かり易く解説します。後半はそれらの知識を使って、言語発達に関する諸現象にメスを入れ、それが（物理的には）如何に摩訶不思議な現象であるのかを解説します。例えば、幼児の音声学習や、自閉症や音韻性ディスレクシアの音声言語発達に見られるビヘービアを取り上げます。一部、動物の音感についても取り上げます。講演者は音声工学の専門家ではありますが、発達心理学の専門家ではありません。ですので、前半は枯れた内容の提供となり、後半は、発達心理を専門とする若き研究者に対する、研究ネタの紹介になるのだろうと考えています。

[目次へ](#)

矢藤優子 先生（立命館大学）

「描線情報解析ソフトを用いた描画発達検査の分析」

発達心理学とその周辺領域において、描画検査は子どもの内的世界を投影するものとして、または知能検査の手段として、幅広く用いられています。とりわけ言葉による報告や質問紙への回答が困難な幼児にとって、描画による回答は比較的容易であり、その点で描画検査は有効な手法であるといえます。一方、描画検査はその解釈や客観的評価に時間や熟練を要するという欠点もあり、大量のデータを分析するのは困難です。

そこで本セミナーでは、グッディナフ人物画検査、ベンダーゲシュタルトテスト、レイの複雑図形などのテストに「デジタルペン」（DP201、ANOTO 製）と描線情報解析ソフト「Elian」（Seldage 製）を用いることで、子どもが絵を描く速度、筆圧、描き順、描画の大きさ、用紙の中での位置関係、軌跡のストローク情報（ストローク数や長さなど）などの基礎データを抽出し、その標準値からの逸脱を自動診断できるシステムについて紹介します。また、現在開発されつつあるベンダーゲシュタルトテストの自動採点システムのデモを行います。Visual-motor テストにおいて「完成された絵画」（何を描くか）ばかりでなく「描画活動のプロセス」（どのように描くか）に注目することは、臨床にも研究にも有益な情報を提供すると考えられます。

[目次へ](#)

高橋雄介 先生（京都大学）

「発達のアウトカムに関する縦断研究」

発達心理学の興味・関心の中心は、当然のことながら、心理学的な変数の「発達」にあるはずです。発達とは、変化・成長・適応・加齢・老化などの様子です。

調査研究において、これらの様子について記述するためには、横断データでは不足があります。横断調査に基づくデータのみを用いて複雑な分析を行ったとしても、また、その分析の中で仮に単方向のパスを引いたとしても、それらから得られた結果はあくまで相関的な関連性を示すのみであり、変化や発達に言及できるだけの積極的な論拠には相当しません。一方で、縦断調査に基づくデータを用いた分析を行えば、変化や発達に踏み込んだ言及を行う際には、横断研究に比して幾分有用な論拠を与えることが可能です。

縦断研究によって得られたデータから有用な情報を最大限に引き出すためには、それに適した統計手法を適用する必要があります。そこで、今回のチュートリアル・セミナーでは、変化の動態や発達の個人差に焦点を当てるための縦断データに対する分析手法についていくつか具体的を挙げながら、そして、最新の知見なども交えながら、皆さまと議論を行いたいと思います。

[目次へ](#)

星野崇宏 先生（東京大学）

「準実験デザインと因果効果推定：無作為化実験ができない場合のデザインと解析法」

発達心理学研究において量的研究を行う場合には、例えば親の養育態度が子どもの社会性の発達に与える影響など、特定の要因の長期的な影響に关心があることが多いと思われます。長期の影響を考慮する以上、基礎心理学分野で利用される研究デザイン、例えば「被験者内要因の無作為化を伴う実験研究」は条件の効果の消去が通常できないために利用できません。また研究協力者をランダムに各条件に割り当て、条件間の比較を行う「無作為割り当てを伴う実験研究」も倫理上の問題や研究者が割り当てた条件に従わない協力者がいるというコンプライアンスの問題が生じ、実際には実施できない場合がほとんどです。

無作為実験ができない場合であっても特定の要因単独の効果（因果効果）を推定するための研究デザインと解析方法はこの10年ほどの間に大きく発展しており、すでに医学や経済学、社会学などでは一般的な方法論として確立し、また発達心理学でも Child Development など欧米の学術誌で利用事例が増えています。本チュートリアル講演では実験ができない調査観察研究において因果効果を評価するための研究デザインやデータ取得に当たっての注意点、解析方法、結果の報告方法などについて具体例と共に紹介します。

[目次へ](#)

岡田謙介 先生（専修大学）

「心理学における効果量をめぐる最近の動向」

心理学研究において、t検定や分散分析のF検定に代表されるような統計的仮説検定は、長い間主要な統計分析法としての地位を占めてきました。しかし近年、帰無仮説を積極的に主張できないことや標本サイズへの依存性、データ収集における停止規則への依存性など、仮説検定という手続きの持つ問題点が再認識されるようになり、仮説検定だけに頼らない心理学データ分析が求められるようになっています。

こうした流れの中で、研究上本来関心のある量である、効果量（effect size）を重視することが論文の著者に求められています。アメリカ心理学会の論文執筆マニュアル（APA Publication Manual）においては、論文における効果量の記載と活用を著者に求めるとともに、実際に数々の効果量をどのように記載するべきかも示しています。本学会においても「発達心理学研究」誌の論文原稿作成のための手引きにおいて、「できる限り効果量も記載する（p.6）」旨が、我が国の学会としてはかなり早期から規定されています。そこで本チュートリアルでは、発達心理学研究における活用を念頭に、効果量の定義からはじめ、効果量をめぐる最近の話題と活用の指針を紹介します。既存の多くの研究成果を、効果量を用いて統合するメタ分析についても触れます。

麻生武 先生（奈良女子大学）

「フィールドにおける観察という方法：私は必ず現場に戻って来る」

[目次へ](#)

私が行ってきた観察は3タイプあります。1つ目は、息子、甥、孫の観察です。現在も細々と孫観察を続けています。2つ目は、幼稚園観察です。園長であった3年間の観察と、現在月1で園で行っている巡回相談的観察です。3つ目は、今は行ていませんが15年間ほど行った就学前療育に関する参与観察です。実験的に第三者視点で観察する計量的なサンプリング研究は行っていません。何のためにフィールド観察するのでしょうか。そこには人が生きている場があるからです。研究には「問い合わせ」が必要ですが、「問い合わせ」はフィールドを通じて思索続けることから生まれてきます。「観察」研究で一番大切なことは、「観察」体験を自分の財産として保持することです。記憶には限界があります。ビデオや録音のデータはすぐにプロトコール化できないほど圧倒的な分量になってしまいます。文字やスケッチに書き表すことが「観察」体験を保持するには最も有効な方法に思えます。自分の観察文を読んで、その観察シーンが「立ち上がるか否か」が勝負です。それに勝ちきるには、その場へ即座にワープし、新たなエピソード記憶を再生させる必要があります。まるで、その場のことを永遠に覚えているように語る保育者や教育実践者に会われたことがあるでしょう。私たちに必要なのは、それに匹敵する「観察記録」を書き留めることです。どのようにそのような記述が可能なのか、またどのように「問い合わせ」を見出して行くのか、みなさんと一緒に考えたいと思います。1つの体験が深く記憶に刻まれ、私たちに「問い合わせ」を投げかけ続けることがあります。それが観察研究の醍醐味です。

アクションリサーチとは、現場の当事者と研究者が共にコトをなすことを通して、正確には、もとの当事者と研究者が共になすコトを通じて形成する包括的な当事者性のもとで、共同知を生みだすことを目指した研究活動です。本チュートリアルでは、筆者自身の取り組みから代表的なものを紹介します。

第1は、阪神・淡路大震災をきっかけに作成した防災ゲーム「クロスロード」です（当日プレー予定）。約15年前、ゲーム作成の基礎となったインタビュー調査の対象者が、現在、「クロスロード」のファシリテータとして活躍していることの意味などについて考えていきます。

第2は、「Days-Beforeの語り」の試みです。これは、1/16や3/10、つまり、破局的な出来事が起ることなど知る由もなかつた「あの頃」について語る試みです。被災者の語り部団体で15年以上にわたってアクションリサーチを実施してきた結果として行き着いたアプローチで、被災者になる前の被災者、被災地になる前の被災地について知ることが、結果として被災の意味を浮き立たせます。

人間や地域に向き合う人間科学が、ワンショットの研究で片づくはずがありません。当事者との長期にわたる共同実践が、当初の当事者のみならず周囲へも波及する中で、新たな研究や実践を生み出す。これこそがアクションリサーチの醍醐味であり、それを多くの方と共有したいと思います。

本ワークショップは、キャシー・シャーマズ（Kathy Charmaz）により近年考案された構成主義的なグラウンデッド・セオリー法（CGT）を紹介するものです。グラウンデッド・セオリー法はデータそのものに「根ざした」（grounded）理論構築をめざす、質的データの収集・分析に関する系統的なガイドラインであり、シャーマズの CGT はグレーバーとストラウスによる古典的または客観主義的と呼ばれるグラウンデッド・セオリー法とは認識論的立場およびその具体的な技法において一線を画しています。CGT は、ここ数十年の思想的潮流を反映して発展した第二世代のグラウンデッド・セオリー法です。

国内外を通じて現在までに複数のヴァージョンが存在しているグラウンデッド・セオリー法であるが、近年は CGT を研究手法として採用したことを明記した論文も少なくありません。しかし、他のヴァージョンとは異なる CGT のもつ特徴が分析プロセスや結果・考察部分に明確に反映されている論文は十分とは言い難く、本手法を用いることの意義が可視化されにくいというのも事実です。そこで本ワークショップでは、CGT がもつ種々の特徴を解説した上で、CGT がどのような研究目的と高い親和性をもつのかについて検討します。また、サンプルデータを用いて CGT によるデータ分析の例を示すことで、具体的な分析プロセスのイメージを受講者に掴んでいただきます。

安田裕子 先生（立命館大学）

「複線径路・等至性アプローチ（TEA）—過程と発生をとらえる」

TEA（Trajectory Equifinality Approach: 複線径路・等至性アプローチ）は、Equifinality（等至性）の概念を、文化的・発達的事象に関する心理学的研究に取り込んだことにはじまる、過程と発生を捉える質的研究法です。

TEA は、①対象とする経験（者）を抽出する理論 HSI（Historically Structured Invitation: 歴史的構造化ご招待）と、②文化的記号を取り入れて変容するシステムとして人間のメカニズムを仮定し、理解・記述するための理論 TLMG（Three Layers Model of Genesis: 発生の三層モデル）と、③時間上の変容・維持の過程を描く方法 TEM（Trajectory Equifinality Model: 複線径路・等至性モデル）により構成されます。TEA は、文化をまとい時間とともにある人間のライフを捉え描き出すための方法論です。研究目的から HSI により対象を抽出し（等至点の設定）、システムの内的変容過程を TLMG で理解しつつ、TEM で、行動選択や意思決定の有り様をプロセスとして描くというように、TEM がその中心となります。

TEM では、等至点、分岐点、複線径路、非可逆的時間といった概念を用いて、文脈に埋め込まれ時間とともにある人生の径路や人間の発達の多様性・複線性を捉えていきます。当日の講習会では、基本概念を理解したうえで、TEM による簡単な分析を行い、TEM で何ができるのかを実践的に習得することを目的とします。

[参考書] サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房

安田裕子・サトウタツヤ (2012) TEM でわかる人生の径路—質的研究の新展開. 誠信書房

[目次へ](#)